

## 最終覆土の施工方法について

■ 前回(平成26年8月27日)開催した安全管理委員会における検討状況は次のとおり

### 1 事業団が考える最終覆土工事の説明

H25.12月(概算設計)		H26.4月(詳細設計)	詳細設計の考え方
<p>①埋立エリアは、貯留構造物(えん堤)の天端まで土砂で平らに覆う。</p> <p>※覆土の標高:一律802m</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: fit-content; margin: 10px auto; padding: 5px;">                     法令基準に適合する施工内容                 </div>	<p>・国との調整 ・安全性の向上の検討</p>	<p>①埋立エリアは、約2%の排水勾配をつけて土砂で覆い、貯留構造物の内側には側溝を設ける。</p> <p>②貯留構造物の天端にある遮水工を土砂で覆う。</p> <p>①、②の施工に伴い、天端に土留コンクリート壁を設置する。</p> <p>※覆土の標高:(低)802.5m~(高)805.75m</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: fit-content; margin: 10px auto; padding: 5px;">                     安全性を向上させた施工内容                 </div>	<p>閉鎖決定(H25.12)後、満杯にならなかった埋立地を長期間、安全かつ安定的に管理するための施工内容について環境省と協議した結果、</p> <p>①埋立エリアは、水溜りが生じないよう約2%の排水勾配をつけ、表流水(雨水)を貯留構造物や左右岸付近に設置する側溝を經由して速やかに埋立地外に排水できるようにした。</p> <p>②天端にある遮水工(遮光性不織布及び遮水シート)は、日射等による経年劣化が生じないようにした。</p>

### 2 地元委員から出された意見

- (1)上記のように貯留構造物より高い802.5mから覆土する方法の安全性について、学識経験者の金子委員の考えを直接聞きたい。…〈施工方法A〉
- (2)上記以外に、天端の高さ802mから覆土する方法も検討し、どちらが安全か説明してもらいたい。…〈施工方法B〉

### ■ 施工方法A,Bの検討結果(説明図面)

	貯留構造物付近の詳細	排水計画	検討項目
施工方法A(802.5m)	図A-1	図A-2	・埋立地の表流水(雨水)の排水 ・貯留構造物天端の遮水工とへり部分の保護 ・施工の安全性 ・維持管理
施工方法B(802m)	図B-1	図B-2	

### ■ 結論(事業団の考え方)

「A」(802.5m)は、埋立地の表流水(雨水)を円滑かつ継続的に排水でき、貯留構造物天端の遮水工とへり部分の保護もできる。また、土側溝の設置時に廃棄物を掘削除去する必要がなく、維持管理も容易である。  
したがって、将来生じる埋立地内の地盤沈下に対応し、長期間より安全かつ安定的に維持管理できるのは「A」(802.5m)である。